

優秀賞

見守るということ

東京都 暁星小学校 六年 工藤維斗

高学年になると、六時間授業の日が多くなり、帰宅時間もおそくなる。

放課後にプリントを仕上げたり、委員会の話し合いに参加すると、帰りが 16 時を過ぎることがあり、そうなる
とホームも電車も混雑している。

帰りの地下鉄でよく見かける白い杖の男性は、僕の最寄り駅のとりの駅で降りる。途中の高田馬場駅で、
地下鉄から私鉄電車に乗り換えるのだが、夕方は背広を着た人から高校生、大学生まで、大勢の人で大変
な混雑だ。

その日は、大学生くらいのお兄さんやお姉さんたちが特に多くて、地下鉄を出てすぐの場所から階段まで、
白い杖のあの男性が、無事にたどり着いて地上の私鉄に乗換えができるか、僕は心配ですぐ近くで見守るこ
とにした。

僕が小さいころから、「黄色いブツブツ」と呼んでいる視覚障害者用の誘導用ブロックの上を、たくさんの
人が急ぎ足で進んでいる。横切る人もいるし、前からくる人もいるので、背が高くなった僕でも注意していな
いと前に進めない。

僕はハッとした。黄色いブツブツの先に、大勢の大学生が大きなかばんを置いて、笑いながら話したり、ス
マートフォンを操作しているのが見えたからだ。

白い杖のあの人がぶつかって、転んでしまったら大変なことになる。

人ごみをかきわけて僕が助けにいくより前に、白い杖がブツブツの上に置かれたかばんに当たり、男性は
横に曲がってしまった。そのまま一度立ち止まり、杖を小さい間隔でコンコンと鳴らしながら、くるくる回ってし
まったのだ。

大学生たちはまったく気がついていない。僕は男性にかけ寄って、

「大丈夫ですか、お手伝いしましょうか。」

と、顔をのぞきこんで下から話しかけてみた。

「大丈夫です。」

と、男性は小さい声で答えたあとに、白い杖をまたコンコンと動かしながら、なんとか荷物の向こう側の黄色い
ブツブツにたどり着くことができた。

僕はほっとしたと同時に、なんだか恥ずかしくなってしまった。

階段を上がって、私鉄に乗り換えればあと 3 駅だ。白い杖の男性はその前の駅で降りるから、僕は少し離
れた場所から見守ればいいんだ。

そう思い直して、僕はゆっくり上がりはじめた。すぐうしろにいた背広の男性に、

「君どこの小学生？ えらいね。」

と話しかけられた。僕は少しもえらくない。白い杖の男性を守れなかったからだ。

次は大学生たちに、勇気を出して荷物をどかしてくれるようお願いしてみようと思う。

見守るということは難しいけれど、僕は中学生になってもこの気持ちは大切にしたい。